

# 教育 を 読む

河合文化教育研究所  
主任研究員 丹羽健夫

鎖国政策がとられていた江戸時代末期まで、公式の留学は1862年の榎本武揚ら15名の技術者集団のオランダ留学を除いて、みる事ができない。ただしジョン万次郎などの漂流者の偶発的留学や、長州藩や薩摩藩の藩士による集団的密航留学があったが、それらは幕府の目をはばかっていたのもであった。

それが明治の世が明けると、堰を切ったように留学熱が起こる。明治年間を通じてなんと2万人もの留学生が海を渡る。その先鞭をつけたのが明治4（1871）年の岩倉使節団である。これは近代国家の青写真を作るために世界を見て回ろうという試みだが、一行104名のうち途中下車させる留学生を43名も連れている。そのなかに5人の女子留学生がいた。

吉益亮子（15歳）、上田梯子（15歳）、山川捨松（12歳）、永井繁子（9歳）、津田梅子（8歳）である。

各人は当時ワシントンの弁務公使を務めていた森有礼の世話で、まず英語を身につけるために一般家庭に預けられる。山川捨松の場合はニューヘイブンのベーコンという牧師の

家に寄留するが、そこで親身もおよばぬ米国の家庭の温かさに包まれ、成長していく。そして16歳になると公立高校のヒルハウス・ハイスクールに入学し、19歳で才媛の集まるといわれた女子大学ヴァッサーカレッジに入学する。大学では成績も優秀で、かつ人気者で2学年のときにはクラス委員長をつとめ、卒業時には卒業生代表のひとりとして卒業演説をし、それが新聞にも載り、賞賛される。

しかし国との約束の10年の留学期間も過ぎ、津田梅子と同時に帰国する。

帰国した彼らに祖国は冷たかった。無理もない。当時の日本の世相としては、女性の就職の機会などはほとんどないのだ。それよりも気がつけば彼ら二人は日本語を忘れてしまっていたのだ。これでは就職などできまい。二人は英語の個人教授で糊口をしのぐ。

そんな時、捨松に幸運が訪れる。陸軍卿の大山巖から結婚の申し込み

を受けたのだ。大山はのちの日露戦争では満州軍総司令官になるなど、当時の陸軍の俊才である。しかし性格は鷹揚で「ガマ」というニックネームで人気があった。彼も明治4年から4年間ほどフランス、スイスに留学している。捨松は大山のプロポーズを受け入れる。大山捨松の誕生である。

明治15（1882）年、二人の結婚披露宴は完成したばかりの鹿鳴館で行われた。鹿鳴館といえば不平等条約改正のため、日本政府が近代化、欧米化の姿を内外に示すため作られた、欧風社交場である。二人の会話は日本語のまだ不自由な捨松を慮ってか、英語で交わされたという。なんとも優雅ではないか。

やがて時がたち明治32（1899）年女子英学塾が創立される。塾長津田梅子、顧問大山捨松。津田塾の前身である。

この書は日本女子留学生の先鋭たちの奮闘の物語である。著者は本書の主人公捨松の曾孫である。



◀『鹿鳴館の貴婦人 大山捨松  
日本初の女子留学生』  
著者 久野明子  
(中公文庫)  
定価 本体 952 円+税